―― 文章見本 ――

恋のレッスン７８９

漆

登場人物紹介

【シチロージ】十七才の高校二年生。薙刀部。刑事島田カンベエに淡い？恋心を抱いている。出会った頃は巡査だったカンベエが交番勤務を離れ、顔を合わせる機会が減ったことを残念に思っている。

【ヘイハチ】同じく高二。機械や電気回路などに興味があるが、特定の部活には所属せず、時折科学研究部などの手伝いに駆り出されている。通学路にある古い電器店兼駄菓子屋に通い詰めるのは、店主のゴロベエがお目当てゆえ。

【キュウゾウ】同じく高二。帰国子女。帰国したのは小学生の時だが、滞在国での習慣により、日本でもずっとボディガード付き。私立のお嬢様校でソフトボールに明け暮れる毎日。

【島田カンベエ】刑事。交番勤務の巡査時代に７８９が道に迷ったお年寄りを連れてきたのが、シチロージとの馴れ初め。それ以来彼女が可愛くて仕方がないのだが、ボーイフレンドと言うには年が離れすぎているのを気にしている。

【片山ゴロベエ】古い電器店兼駄菓子屋の店主。カンベエの巡査時代の先輩。小学生の頃からお小遣いを握りしめて通ってくるヘイハチを、毎日秘かに楽しみに待っている。

【ヒョーゴ】キュウゾウのボディガード。武術の武者修行気取りで海外を放浪中にキュウゾウの両親にスカウトされ、そのひとり娘のボディガードとなった。以来ずっと側を離れず、成長したキュウゾウに疎まれている。

ウォーミング・アップ

十月の、ある金曜日の夕暮れ。

陽が傾くと同時にヒンヤリとした空気が住宅街を包み込んだ。古い家屋や個人商店も混じる、開発から年数の経った一画に、三人娘が通うバレエ教室があった。

「ふたりとも、今日の予定は？」

恒例の週一回のレッスンを終えて更衣室で着替えながら、ヘイハチが連れのふたりに尋ねた。肩の上で切りそろえた赤毛のおかっぱは、耳の後ろで左右に束ねただけで身支度が終わっている。

「あたしは、部活に顔を出すつもり」

背中まで届くサラサラの金髪にブラシをかけながら、シチロージが即答した。

「大会が近いの？」

「それは来月。でもその前に市の交流会があるのよね。大先輩のおばちゃん達も出場するから、高校生はみんな緊張しまくり」

手にしたブラシを頭上からすいと振り下ろし、シチロージは薙刀の構えをしてみせる。

「ご苦労さん」

「キュウちゃんは？」

話をリレーするかのように、シチロージが隣で着替えるキュウゾウの方を向いた。水を向けられたキュウゾウは、制服の上着をかぶりかけたままで一瞬動きを止め、それからおもむろに顔を半分覗かせた。

「オレは、明日から遠征だから、今日は帰って準備をする」

「今週も遠征？完封記録を伸ばしてきてね」

会話が一回りして、ヘイハチが締めくくる。しかし、激励の言葉は無視して、キュウゾウはボタンを留めたままのブレザーに再び無理矢理頭を押し込んだ。

「そう言うヘイちゃんは？」

ロッカーの鏡とヘイハチとを交互に見ながら、シチロージは頭上でひとつにまとめた髪を、器用に三本の三つ編みに仕上げていった。
「帰宅部は帰るのみ！それに、バレエのある日は、どこの部の手伝いも断ってるしね」
答えながら、ヘイハチは途中でつかえてしまったキュウゾウの上着を取り上げる。一緒に引き抜かれて、キュウゾウのバター色の髪が逆立った。
「バレエと言ってもねえ」
ヘイハチの言葉にシチロージが苦笑し、キュウゾウのバッグからブラシを取り出してクシャクシャになった髪をとかしてやった。
「いまじゃ、週一でこうして顔を合わせる口実だものね」
そうそう、とヘイハチも頷く。
「小学生の頃は、発表会を目指して毎日レッスンに通ったこともあったっけ。なのに、どうして三人とも中学から違うことを始めちゃったんだろ」
「それより、いまだにこうしてバレエを続けてることの方が、あたしから見たら不思議よ。…あ、キュウちゃん、バッグからタオルがはみ出してるよ」
あれこれと世話を焼かれっぱなしのキュウゾウは、上着のボタンを外してくれているヘイハチにじっと視線を向けていた。
ヘイハチがちょっと口を尖らせる。
「何？自分でボタン付けをしない人は、制服に迷惑かけちゃダメ。可哀想だよ」
ややあって、キュウゾウがぼそっとつぶやいた。
「ヘイハチの運動不足解消にはちょうど良い」
その真面目な表情にもかかわらず、後のふたりは一瞬きょとんとしてから吹き出した。
「何のことかと思った。週一のバレエの事ね。あははっ…！キュウちゃんが冗談言った！」
「やだあ！いつ聞いても、すごい受ける！」
「……」
ひとしきり笑いあったところで、更衣室の扉が開いて声がか

かった。
「相変わらず楽しそうね。そろそろ一旦閉めますよ」
「あ、先生。今帰ります」
「お疲れ様」
「さよなら、先生。また来週！」

レッスン・キュウ

笑いを顔に張り付けたままのふたりと憮然としたひとりとが建物の外へ出ると、辺りはうっすらと靄がかかっていた。
「昼間は春みたいにほわんとしてたけど、さすがに夕方は冷えるわね」
「早く帰ろ！…あ、キュウちゃん、お迎えが待ってるよ」
ヘイハチが示した先に車が一台停まっており、その傍らにスラリとした若い男が立っていた。長いコートの裾がわずかに風に揺れている。
「こんにちは、ヒョーゴさん」
「やあ。お疲れさん」
しかしキュウゾウは、挨拶し合う一同に背を向ける。
（キュウちゃん）
シチロージが腕をとって小声で引き留めた。それにかぶさる

ようにヒョーゴも名を呼ぶ。
「キュウゾウ！」
その声は取り立てて大きくも厳しくもなかったが、有無を言わせない響きがあった。
「今日は急ぎの用が出来た。時間がない」
キュウゾウはなおもそれを無視して、車とは反対方向に歩き始めた。
「ほらほら。迷惑かけないの」
シチロージがたしなめれば、ヘイハチも同調する。
「そ。贅沢言わないの」
友の言葉に、キュウゾウは立ち止まった。
「…贅沢？どこが」
「分かってるくせに。さっさと車に乗って帰りなさい」
キュウゾウはまじまじとヘイハチの顔を見、それから小さく答える。
「馬鹿め」
「その続きは、また来週ね！」
そうだ、今週のお楽しみはこれでお仕舞いなのだと、キュウゾウにも区切りを付けるべき時であることは分かっていた。
「また来週な」
ぼそっとつぶやくときびすを返して車へ行き、まず後部座席にカバンやスポーツバッグを放り込んでから助手席に乗り込んだ。シートベルトをカチッといわせるのを確認してから、ヒョーゴもようやく運転席に腰を落ち着ける。
「それじゃお先に。この頃は日が暮れるのが早いから、気をつけて行きたまえ」
フロントガラス越しに、シチロージ達も挨拶を返す。
「ヒョーゴさんも、運転に気をつけてね」
「バイバイ、キュウちゃん！」
見送るふたりを残して車は発進した。